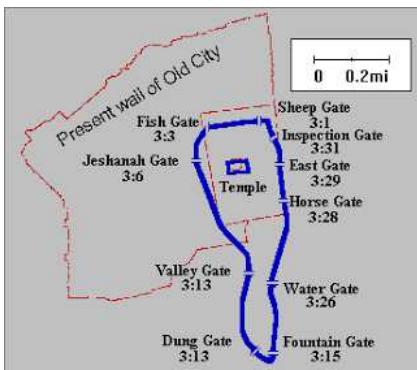


アルタクセルクセス王の第二十年に、わたしはユダの地の長官に任命されたが、その日から第三十二年までの十二年間、わたしも兄弟たちも長官の給与を一度も受け取らなかった。(ネヘ 5:14)と記しているネヘミヤが BC445 にユダヤに総督として帰還しました。キュロス王による解放後 94 年目になります。ネヘミヤはペルシャの首都スサでアルタクセルクセス王の献酌官をしていました。スサは高度な、独自の文明を誇っていた都でした。献酌官とは王の身の世話をする役なのでしょうか。イスラエル人でありながら、王宮に住み、王の信頼を得て働くのですから、有能な人物だったのでしょうか。

ネヘミヤの親族が訪ねてきて、「捕囚の生き残りで、この州に残っている人々は、大きな不幸の中にあって、恥辱を受けています。エルサレムの城壁は打ち破られ、城門は焼け落ちたままです。」(ネヘ 1:3)とユダヤの様子を伝えたのです。これを聞いたネヘミヤは座り込んで泣き、幾日も嘆き、食を断ち、神に祈りを捧げました。故国が滅びたことは民の罪。しかし神は民を贖うと約束された。懺悔と願いを込めて、ネヘミヤは祈り続けたのです。王はネヘミヤの心の苦しみを察し、ネヘミヤの望みを聞きました。

ネヘミヤは王にパスポートとエルサレムの再建用の木材調達の書状をもらいました。王は王宮の将校、武官の随行の便宜も図らせてくれました。エルサレムでは有力な異民族アンモン人トビヤ達がネヘミヤの来訪を知り、機嫌を非常に損ね、警戒を強めました。ネヘミヤは密かに調査をしました。



夜中に谷の門を出て、竜の泉の前から糞の門へと巡って、エルサレムの城壁を調べた。城壁は破壊され、城門は焼け落ちていた。更に泉の門から王の池へと行ったが、わたしの乗っている動物が通る所もないほどであった。夜のうちに谷に沿って上りながら城壁を調べ、再び谷の門を通って帰った。(ネヘ2:13)

事態を正確に知ったネヘミヤは修復の計画を練ってから、ユダの人々、祭司、貴族、役人、工事関係者に「御覧のとおり、わたしたちは不幸の中であえいでいる。エルサレムは荒廃し、城門は焼け落ちたまままだ、エルサレムの城壁を建て直そうではないか。そうすれば、もう恥ずかしいことはない。」(ネヘ2:17)と訴えると、彼らは早速建築に取り掛かろうと奮い立ちました。

トビヤ達はネヘミヤの行動を王への反逆だと責めました。そのときネヘミヤは天にいます神御自ら、わたしたちにこの工事を成功させてくださる。その僕であるわたしたちは立ち上がって町を再建する。あなたたちには、エルサレムの中に領分もなければ、それに対する権利も記録もない。(ネヘ 2:20)と反論します。揺るがない信仰に立とうとするだけでなく、昔から、イスラエル人は権利の記録を保存する民族であったようです。大祭司、祭司と共に、羊の門、魚の門、炉の塔、谷の門、糞の門、泉の門、貯水池、水の門、馬の門と、次々に修復、補強し、扉をつけました。壁を塗り、階段を補修しました。

けれども順調に進んだわけではありません。貴族たちは指導者たちの作業に服しません。異教の現地人は嘲るだけではなく、皆で共謀して攻め、混乱に陥れようとします。この事態に昼夜働く民は意気を失いかけます。そこで城壁外の低い所、むき出しになった所に、各家族の戦闘員を、剣と槍と弓、警報に角笛を持たせて配置しました。作業員を工事と警護の二班に分け、ペルシャの将校は背後の守備に控えました。ところが、民とその妻たちは働き手を取られ、食料不足、重税、負債が苦しいと訴えます。ネヘミヤは大きい集会を開き、自らがしているように、民へ金、穀物を貸し、負債を帳消しにするように求めました。民はこれに同意し、皆で「アーメン」と答え、神を賛美したのです。城壁は五十二日かかって、エルルの月の二十五日に完成した。わたしたちのすべての敵がそれを聞くに及んで、わたしたちの周囲にいる諸国の民も皆、恐れを抱き、自らの目に大いに面目を失った。わたしたちの神の助けによってこの工事がなされたのだということを悟ったからである。(ネヘ 6:15)と修復が完成したと記されています。